『ウン。昨日上町のおつさんが具合が悪い云ふて知らしに來たんで、見舞に往て未だ歸つて來よれへんね』

『アヽ不在なら恰度幸ひや、居て貰ふと鳥渡都合が悪い、と云ふのはお前とこの嗅村屋。能ふ饒舌る女やなア。口の端に黒子が有るやろ、彼れ饒舌り黒子云ふのやで。世間でお前とこの嗅を、お松ツあん云ふ者は一人も有れへんがナ。雀のお松つアん。雷のお松つアんと二つ名が附いたアる。』

『敵わんで。明けても暮れてもガラ〳〵ガラ〳〵鳴り通しや。雨も降らんのに何故あないに鳴るのやろ。あら乾雷やろかナ。』

『お前まで同じ様に云ひないナ。處で不在が幸ひと云ふのは他や無い、此間友達が寄た時に話が出たやろ。大分暑つなつて來た依つて、一遍船行きを仕様や無いか云ふてたなア。あの話が決つて今日往く事になつたんや、お前もあの時交つてた依つて若し誘はなんだら後日で怒るやろと思ふて鳥渡寄つたんや、どふや往けへんか。』

『往く〳〵〳〵〳〵。よふ誘ふて呉れた、大きに有難ふ。誰々が往くね。』

『旦那衆が一人でも混つて居ると氣が擱けて飲む酒が身に附かん、今日は汝れか俺れかの連中ばつかりや。花屋の松公に疊屋の猪イ公、肉屋の丑公に米屋の米公、金物屋の鐵に風呂屋の勇公、其處へお前と俺いや。』

『心易い友達ばつかりやな。鳥渡待つてゝや。何ぞ蒲鉾でも二三枚買ふて來て提げて往くワ。』

『オイ、泥臭りした事云ひないナ。船行きでもせふ云ウのに内から辨當提げて往けるかいナ。魚は濱から活の良えのをドンと仕入れて料理人が乘てるね、菰被り一挺据えて飲み次第の喰ひ次第や。男ばつかりでは凝ついて不可んさかい、南の藝妓が聘したアるねが皆名馴ばつかりやで。色氣無しの年増が面白いちウので、お松に小松に唐松に荒神松。おちよねに小ちよねと此んな連中や。』

『ウワー往く〳〵。誰の奢りや知らんけど、お前から充分禮云ふといてや。』

『オイ〳〵。ちと厚顔し過ぎやへんか。左様やがナ。今名前云ふた中で誰ぞ一人で奢る様な顔振れが有るかいナ。今日は斬り合ひや。』

『長刀持つて往くのんか。』

『違ふがナ。頭割りや。』

『矢つ張り鈍で。』

『解らん男やなア。割前やがナ。』

『へーえ。そいたら割前か、アノ割前か。』

『左様や。何や顔の色が變つたナ。』

『そーんーなーらー。なハハんフフぼホホやハハハ。』